松村通信第１１５号

2021 年 1 月 31 日
松村勝弘

菅義偉論・近代化論

菅義偉論　最近、『表現者クライテリオン』2021 年 1 月号を読んだ。その特集が「菅義偉論」だったので、読んだ次第。かねてからこの人の性格が理解できなかったので、読んでみた。菅総理は生まれはよくないけれど、苦労して上り詰めたというのが一般的な理解である。苦労人は自分の苦労は人にさせたくないというタイプの人と自分が苦労したから人も同じ苦労をすべきだと考えるタイプの二通りあるが、後者の典型だろうと思っていたが，やっぱりそのようである。小選挙区制で自民党内での権力集中があり、内閣人事局設置で政府内で官邸が強くなり、トップ暴走の基盤ができ、安倍前総理を引き継いだ菅総理がそれをかじ取りしているわけである。佐藤優は「表向きのスローガンはさておき、安倍さんが強力な指導者であると見せることを通していくつかのグループが自らのための『利益』を生み出し続けている」そういうシステムが構築され、かくて完全なニヒリズム、虚無主義が菅総理によって，最も強烈に貫徹されている、と言っている(14 頁)。菅総理はどうやら権力志向が強すぎるから(古賀 27 頁)，暴走をはじめたようである。その性格からブレーンがいない。ブレーンらしき人物としては竹中平蔵と「中小企業を潰せ」と言っているデービッド・アトキンソンだという(古賀 30 頁,亀井 41 頁,佐高信 64 頁)。「だから,菅内閣は竹中内閣なのである。[竹中は]『いまだけ、自分だけ、カネだけの男だ』」（佐高信「菅政権は半グレ政権」64 頁)。まさに推して知るべしである。竹中はきわめてご都合主義の新自由主義者である。

出羽守（でわのかみ）　「出羽守」ということばがある。よく識者が「アメリカでは」とか「フランスでは」という言葉を振り回す。そこでそういう西欧崇拝者を出羽守という。竹中もその一人である。アメリカ崇拝でアメリカ方式導入をしかもアメリカの新自由主義を信奉し、これを日本にも導入すべしという。しかも、アメリカ方式を導入して、ちゃっかりと私益につなげている。非正規雇用をしやすい制度を作っており、自ら会長を務めるパソナの仕事の拡大に役立てるという、いわば自社に都合のよい制度の導入を図って、それを自ら活用して儲けるというとんでもないことをしている。だから「いまだけ、自分だけ、カネだけの男だ」と言われるわけだ。

米国新自由主義信奉　米国信奉は竹中だけではない。米国自身自国の機関投資家の利益を図るために米国式の制度を日本に導入させようとする。もちろん日本でもその尻馬に乗って金儲けをしようとする面々もいる。その一例が私の専門分野であるコーポレート・ガバナンス論に見られる。1990 年代後半からコーポレート・ガバナンス論が高まり、日本でも欧米にならって社外取締役制度を導入したり、コーポレートガバナンス・コードを制定したりしている。安倍政権では成長戦略の一環としてコーポレート・ガバナンス制度の「充実」が図られた。その結果、「過度のガバナンス信仰」（「大機小機」『日本経済新聞』2021 年 1 月 19 日号）もあって、日本的経営でアメリカ企業を凌いでいた日本企業が身の丈に合わない社外取締役制度を導入せざるを得なくなり、その経営の柔軟性が失われ、ますます地盤沈下が進み、それが「失われた 30 年」の一因となっている。もちろん、日本政府や日本企業に知恵があれば、うまく対応できたはずであるが、1980 年代までの好調で図に乗って自信過剰になっていた。この成功体験を引きずったまま、1990 年代のバブル崩壊に翻弄されたという面もある。バブル崩壊自身米国に仕掛けられた「マネー敗戦」（吉川元忠）「第 2 の敗戦」（岡本勉）だという論者もいるくらいだ。日本的経営に浮かれていた日本の政財界は一転自信喪失に陥り、その間隙を縫って、竹中のような新自由主義者の甘言に乗っていわゆる構造改革に邁進したのであった。そして出羽守の跋扈であった。

前近代的日本の舶来信奉　どうしてこうも米国に翻弄されるのだろうか。その根っこには明治以来の近代化の中での日本人の舶来信奉がある。これは一言では言い尽くせないが、残念ながら（もちろんわれわれにも責任があるのだが）普遍的でありながら日本的でもある思想を生み出せていないことにもその遠因がある。

西欧・西洋でも近代とは何かを定義するために、指標を探し求めたのであろう。その際都合よく利用されたのが、当時の後進国アジアであった。＜近代的＞西洋は、自らを映し出す鏡として、＜前近代的＞非西洋を利用したのであった。マルクスもヴェーバーもそういう鏡としてアジア（マルクスの「アジア的生産様式」を思い出す）を利用したのであった（吉■佳［2017］「＜書評論文＞西洋社会の鏡」『京都社

会学年報』25)。ヴェーバーは彼の問題意識「普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる文化的諸現象はなぜ西洋でのみ生まれたのか」に対する答えを出した（吉[2017]61 頁）という。まさに西洋は普遍を代表し、アジアは特殊だと意識されたのであった。これを学んだ日本人（中国人も）は、自らを後進国と認識し、まさに先進国に追い付け追い越せとばかりに工業化路線・成長路線を邁進し、いまだに「成長戦略」（アベノミクスの第三の矢）を是としている。

西欧発近代化論の限界　酒井直樹[2015]（『死産される日本語・日本人　「日本」の歴史－地政的配置』講談社学術文庫）は、＜近代的＞西洋と＜前近代的＞非西洋という対比をして議論を展開するなかで，西欧はアプリオリに普遍を代表している、あるいは西欧の諸論者が無意識にそうしているという。吉[2017]は、マルクスとウェーバーの一致点を「①研究目標が両者ともに東洋を鏡として使い、それと照らし合わせることによって西洋での近代社会の発展を解説することであったこと。②西洋を発展的で、東洋を停滞的であるとみなすこと。③東洋を地理的・環境的な概念で、西洋を時間的・歴史的な概念で理解すること。」(62 頁)などを列挙している。原著者 L.　スナーはイスタンブール大学社会学部の助教授だそうである。まさに非西洋人である。

このような西洋発の「普遍」を信奉して自らを「特殊」と認め、研究を進めることに限界はありはしないか。落合一泰[2008]（「脱西洋中心主義的なグローバル研究はあり得るか？」一橋大学 HQ2008 年夏号 Vol.20）も非西洋人からは「西洋が鍛えてきた学術言語に限界がある」といっている。しかしながら、日本は西洋発の研究を利用しながら、成長を遂げ今日に至っているのは事実である。

近代化・工業化　近代化とは何か。いろいろな考え方もあろうけれど、これは工業化とオーバーラップしていそうである。日本の近代化はいつ始まったのか。それは明治維新以後だというのが普通の理解だろう。その時文明開化が叫ばれ、欧米の知識がどっと日本に流れ込んできた。ここから舶来崇拝、西欧崇拝が始まったと言ってよいだろう。それでも日本人のプライド、アイデンティティを堅持するために「和魂洋才」が叫ばれた。

しかし、近代化は西洋から発信された。そこでの理念型は、英米仏において市民革命がおこり市民社会が成立し、封建的抑圧・宗教的抑圧から解放された市民がブルジョワ社会を形成し、資本主義を発展させた。合理的精神のもとで工業化が進展し、経済も成長した。これがモデルとなった。しかし、これに追い付け追い越せの後発諸国（独・伊・露・日）は、いわば「上からの」ブルジョワ的改革により資本主義を発展させた。そこでは遅ればせながら徐々に市民社会を形成させたのであった（遅塚忠躬[2008]「市民社会の歴史的形成」『クヴァドランテ』(10)）。だが「それら後発諸国は、市民社会を形成しえないうちに、先発諸国（英・米・仏）の促迫による『上からの改革』を余儀なくされたのであるが、そのとき、これら後発諸国では、すでに、国民国家の基礎たるべき国民経済……が形成されつつあった。そういう素地＝基礎があったからこそ、それら後発諸国は、先発諸国に対抗するために、国民経済を資本主義的に編成しつつ、国民国家を形成して、独立を保持することができたのである。」（遅塚[2008]100 頁）

後発諸国も先発諸国に肉薄する経済成長を遂げると、普遍に対抗する特殊を振りかざし、西洋文明の普遍性の脱構築をはかるようになった（許紀霖著・中島隆博／王前監訳[2020]『普遍的価値を求める』法政大学出版局,192 頁）。ドイツの歴史主義しかり、日本の「近代の超克」しかり、最近の中国における「中国モデル」しかり、である。

新たなモデル　許は謙虚にこのように述べている。「現在の中国が世界に新しい普遍性を提供できるような段階に辿り着くまでは、まだまだ道のりは遠いでしょう。それはなぜか。今の中国の台頭、この二、三十年間の台頭、特に最近二十年間の経済高度成長は、あくまでも富国強兵の政策の産物だからです。しかし世界史を振り返ると、新しい普遍性を提供するのは、ただ富国強兵だけではいけない。ドイツもそうだったし、第二次世界大戦の時の日本もそうでした。やはり富国強兵と表裏一体をなす、普遍的な文明がないと長続きはしないのです。これは中国にとっても重要な教訓で、そういう意味では今の中国はまだ新しい普遍性を提供できる段階にはないと思っています。」（許[2020]329 頁）傾聴に値する。

経済成長一辺倒では、いまや新しい時代に即したモデルは出てこないのではないか。それでは西洋の後追いしかできなのではないか。新しいモデルを創出しなければならないのではなかろうか。新しいモデルは過去の栄光に浸っている人たちからは生み出されないであろう。それがどこから生みだされるかは、われわれの日々の研鑽に負うところが大であろう。次回以後、できれば、これらをもう少し深めてみたい。

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。